

第1回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「ミドリノコエ」

沖縄県立那覇西高等学校二年 池宮奈々子



賢治のまちから
高校生★童話大賞

『ミドリノコエ』

沖縄県立那覇西高等学校 一年 池宮 奈々子

光の道のかなた

太陽と樹が心をかわす時

七色の橋のもとに

澄みきつた『奇跡の泉』あり

その水 緑を救い

草は合唱し 木々はしやべりだす

ここ数年、地球にはあまり雨が降りません。ティダの家でも作物が全然育たないので、お父さんもお母さんも元気がありません。昔は緑だったとなりの森も今では、枯れた木々で黒い森となっています。

「はあ、せめて雨さえ降れば…。水さえあれば作物はそだつてくれるのになあ。」

もう、この言葉も聞きあきてしましました。



賢治のまちから
高issy☆童話大賞

「あたしが、『奇跡の泉』を見つけて、緑でいっぱいにしてみせるから、元気だして。」

『奇跡の泉』とはこの地に伝わる伝説の詩の中にでてくる泉の水をかけると、どんな所でも緑でいっぱいになるという泉です。

ティダは奇跡の泉の詩を信じ、一人森へ入っていきました。昔は葉が茂り、木漏れ日のさす温もりのある森でした。しかし、今この森は、太陽はギラギラと焼けるように熱く、枯れてしまつた木々や葉は暗い色をしています。ティダはなんだか森がこわくなつてきました。

それでも、ティダは奥へ奥へと進んでいきました。しばらく歩いていると、何かなつかしいにおいがしてきました。

（あたし、このにおいを知つてる！）

だけど、なんのにおいだつたのかは思い出せません。つられるようにおいについてティダは先に進みました。においの先には、色とりどりの草花に囲まれ、緑の中うずくまつているものが見えました。

「だいじょうぶですかー？」

ティダは大声で言いましたが、返事はなく、聞こえるのはすり





賢治のまちから 高☆交生★童話大賞

声だけでした。

ティダはそろーりと近づき、大きなものの正体に驚きました。

目をまんまるくしたまま息をするのも忘れるくらいです。

なんと、そこにいたのは、木々のように大きな巨人でした。巨人はうずくまり、ひたすら泣いていて、ティダが側にいるのにも、気づきません。ティダは少しずつ近づき、

「ねえ、どうして泣いているの？」

とたずねました。

声に巨人はビックリしてとびあがり、ティダのいる方をそおつと振り返りました。そして、ティダをじつと見つめ、心を許したかのように話はじめました。

「森が死んでいいてる。あんなに元気に歌っていた草達も素敵な咲かせる木々も、みんな枯れてしまつた。もつといっぱいとおしゃべりしたかった。植物達はちゃんと生きていたのに…。」

そこまで言うと、巨人はまた泣きだしてしまいました。でもその声はとてもおだやかで優しい声をしていました。とても巨人が話している様には思えません。巨人は泣きやむ気配も見せないで、ティダは困ってしまいました。そして、思いついたようにこう言



いました。

「そうだ！あたしと一緒に『奇跡の泉』を探しに行かない？そうすれば、この森もまた緑でいっぱいになるかもしれない。」

それを聞いた巨人は涙でぬれた瞳をキラキラと輝かせました。そしてティダの手をとり、まるで子供のように喜びました。ティダもまるで自分のことのように一緒になつてとびまわりました。緑がよみがえることを信じて。

でも、『奇跡の泉』が本当に見つかるかはわからないことです。しかし、今、それを口に出すのは、この大きな友達の顔から笑顔をなくすと思い、心の奥にしまいこみました。そして、二人は『奇跡の泉』を探す旅に出るため、その場所を後にしました。

巨人と一緒に歩いていたティダは思い出したように話しました。「あつ、ねえ巨人さんのお前は？まだ聞いてなかつたよね。名前を呼ぶことで友達は始まるの。」

すると、巨人は少しおどろき、うれしそうに答えました。

「僕が友達？うれしい。今まで人間は僕たちみんな逃げた。君、僕のはじめての人間の友達。僕の名前はウッド。」

さつきまでの泣き顔は、すっかり違う顔になつていました。そ



の穏やかな空気は独特で、ティダはなんだか森に守られているような安心感を感じていました。

「あたしの名前はティダ。少し休んだら出発しよう。ウッド。」

ティダは本当はもう歩くのも嫌なくらい疲れていきました。今まで、こんなに長い距離を歩いたことのないティダの足はもう棒のようでした。しかも、小枝やおれた切り株にひつかかり、足だけではなく手も傷だらけです。

それに気づいたウッドは、不思議な色をした滴を差しだしました。

「これ飲むと、傷もなおる。元氣である。」

ティダがそれを飲むと、たちまち傷は治り、足も元気に動くようになりました。

そして、もう一つ不思議なことに気付きました。まわりにある植物が話をしています。ティダはこの不思議な現象におどろきと同時に楽しさを感じていました。

「ティダ、僕の血飲んだ。僕の友達の声聞ける。痛い傷も治った。」

さつき飲んだのがウッドの血だと知り、ちょっと複雑な気持ちでした。しかし、元気になつたので、また、『奇跡の泉』を探し



賢治のまちから 高☆交生★童話大賞

に出発です。行こうとしたその時、辺りが、霧のように白くなりました。それはタンポポの綿毛でした。タンポポの種たちはいろんな国を飛んできたので何でも知っています。

「ヒマワリを探して。とても大きなヒマワリだよ。そのヒマワリがきっと『奇跡の泉』につれてってくれるから。」

そう言つた後、タンポポの種たちは地面におり、すいこまれるよう土の中に入つていきました。でも、ティダ達には、そのヒマワリがどこにいるかなんてわかりません。でも、歩かないことには何も始まらないので、とにかく歩くことにしました。そして、まだ、生きてる食物たちの話によると、そのヒマワリはどこかのトンネルをぬけるとあるそうです。

ティダは、植物の優しさを感じ、もつと多くの植物とふれあつてみたくなりました。

（その為には、絶対に『奇跡の泉』を見つけなくちゃ！）

ティダは前よりももつと植物のことを好きになりました。

太陽は相変わらず肌にささるように照り輝いています。しかし、ウッドの大きな体のおかげで、ティダの上にはいつも影がありました。それだけで、ティダは大助かりです。



賢治のまちから 高☆交生★童話大賞

何時間歩いたでしょうか。あたりは少しづつ暗くなりはじめました。もう足もとも見えません。どうしようかとおろおろしているとどこからか体にずしんとくるような低い声が聞こえました。

「わしの体に穴がある。その中で眠れば安心だ。」

その声は、ティダとウツドの目の前からしました。よく目をこらすと、言われたとおり、そこには大きな穴がありました。ウツドには少し小さいようですが。

ティダはまるで、家にいるようにぐっすり眠れました。

やがて、太陽が再び顔を出したとき、きのうの声の主の姿がはつきりと見えました。それは大きな大きなスギの木でした。何十年も何百年もずっとこの地球を見てきたような感じで、どつしりと座っています。

「この穴を抜けると、きっとヒマワリに会えるぞ。お前のように、

素直で一生懸命な気持ちなら、縁を救えるはずだ。まかせるぞ。」

穴は見たところ、出口の光が見えないほど長いトンネルのようです。こわがっているウツドの手をひき、ティダは出口を求めて、歩きました。すると、思ったより早く、穴の外の光が見えてきました。ティダの足どりも心なしかだんだん速くなっています。目



の前に、まばゆい光の海が広がりました。その中心には、大きなヒマワリが空をあげ、まっすぐ立っていました。

その迫力といったら、体の大きなウツドでも負けそうなくらいです。鮮やかな黄色は、青い空に映え、まるで太陽のような存在に感じました。

「何しにきたの？」

少し怒っているような口調にウツドは逃げたくなりましたが、ふるえた声でヒマワリを見つめ、こう言いました。

「お友達を生き返らせたい。あなた『奇跡の泉』の場所知ってる。僕達、そこに行きたい。」

ティダはびっくりしました。だつてウツドがとても堂々と思いを伝えようとしているのです。しかし、ヒマワリは高い声で話しはじめました。

「本当に『奇跡の泉』があると思つてるの？それで植物が生き返ると？人間達がこわした自然なのに、どうにもならなかつたから、奇跡の力をかりるの？」それは、間違つてはいませんでした。人間は自分の都合で植物を焼いたり、切つたりしてきたのです。さらに、ヒマワリは話しつづけました。



賢治のまちから 高大生★童話大賞

「植物がどんな風に生きているか分かる？少しでも人に喜ばれようとしてるの。春には美しい花を咲かせ、夏には枝いいっぱいに葉を茂らせ少しでも影をつくり、涼しくさせている。秋にはその葉をキレイに色づけ、冬は寒い中太陽の温かい光をみんなに分けてあげるために枝に葉をつけないの。人が花を摘む時は、植物達は痛いけど、それが運命だと受けとめてる。そんな植物の運命が人間の手で無理やり変えられているのにまた生き返らせ苦しい思いはさせたくない。」

ヒマワリの叫びにティダは胸がしめつけられるようでした。植物がそうやって生きていたなんて、想像もしたことがありません。ウッドは植物の気持ちが痛い程わかるので、泣きだしてしまいました。

その時です。辺りが白くなりました。タンポポの種たちです。「ヒマワリさん、みんなの為を思つていてくれてありがとうございます。でも、仲間が増えるとヒマワリさんもうれしいでしょう？この子達なら大丈夫。また世界中を緑でいっぱいにしてくれるから。」ヒマワリはしばらく黙っていました。

「絶対、緑をよみがえらせてみせる。だからお願ひします。」



賢治のまちから 高☆交生★童話大賞

それを聞いたヒマワリは少し上向きだつた顔をまつすぐ正面にむけました。

「光の指す先に『奇跡の泉』は現われるでしょう。緑を思う気持ちが強ければ大丈夫です。」

それは、安心したようなでもやつぱり、強い声でした。ティダはヒマワリにすべてをまかされたような気がしました。

「やつた。やつとで行ける。さあ、光の先へ急ごう！」

ティダはうれしくてたまりません。でもウッドは黙つたままどこか不安そうです。

光の方向へ歩いている時、ティダはみんなの声を思い出していました。最後まで助けてくれたタンポポの種の可愛らしい声。おじいちゃんのよう温かいスギの木の声。強く心にひびくヒマワリの声。みんなのために、決意をかたくして光の先へと進みます。

光の先には森の出口がありました。

（ここを抜ければ『奇跡の泉』だ。）

ティダは急ぎ足で出口へと向かいます。しかし、ウッドは行きたくなさそうにします。しなウッドの手を引きティダは森を出ました。そこにはウッドの嫌がる気持ちがわかるような景色があ



賢治のまちから 高☆交生★童話大賞

りました。

その光景を見たウツドは泣き叫びました。その声はとてつもなく大きく、涙は雨のようでした。

そこには、まだ、火がついている場所もある、焼きはらわれた森のひどい姿がありました。

「イタイヨ、アツイヨ」

火のついている植物の声は、胸につきさるよう痛く感じます。その声を聞き、ティダはあふれでてくる涙を止めることができませんでした。一人とも、我を忘れたかのように、大泣きです。何時間涙を流しつづけたのでしょうか。ティダがまわりを見た時、火は消え、ポツリポツリと緑の部分が見えました。

また、二人の流した涙がたまつて、泉のように見えました。しかし、涙は止まりません。ウツドの涙は雨のように落ちて、涙がたまつた泉に虹がかかっていました。それは、奇跡の泉の詩のとおりの泉です。大きなウツドの涙は世界中に降りました。それをあびた地面はうるおい、次々と緑が生まれてきましたのです。

また人々はウツドの涙をあび、植物の声が聞けるようになつたのです。そして、世界中の植物たちはおしゃべりをはじめました。

生き生きと

話す植物を見た人々は、今までのことを心から反省しました。緑の前でこう誓い *m* した。これからは、緑を大切に一緒に生きていくう、と。

一方、ウッドは体中の水分を出しきつてしまう程の泣き方です。でもそんなウッドに生きかえった緑たちの声がとどきました。人々が植物に優しくなったことを聞くと、ウッドの涙は止まりました。

でも、その時ウッドの体はティダの手の平に乗るほど小さくなつていたのです。ティダの温かい手の中で、ウッドは小さい、細い声で、

「ありがとう」

と、言いました。その一言はティダの心にとても大きくひびいていました。ふと手の平を見ると、ウッドではなく、一粒の種がありました。ティダはそれを土に埋めました。すると、ティダの目には次から次へと涙があふれ出できます。

その一滴の涙が種の上へと落ちました。

次の瞬間、土から芽がはえ、細い枝はいつのまにか太い幹にな





賢治のまちから 高生★童話大賞

り、大きな大きな樹になりました。その樹は優しく、おだやかで、強い鼓動をしていました。

樹は世界中の緑を見守つているようでした。

そして、人々は植物を摘むとき、食べるとき、助けを貸りるとき、一言話しかけるようになつたのです。そうすると植物達は、うれしそうに摘まれるのです。

緑の声は、心に直接語りかけられるように聞こえます。いつの日か、人間と植物達は、心の通じあつた友達のようになりました。